

2008年5月17日

Bentham 研究会 論文紹介 (児玉聡)

Kwame Anthony Appiah, *Experiments in Ethics*, Harvard University Press, 2008, ch. 1.

著者 : Laurance S. Rockefeller University Professor of Philosophy and director of the Centre for Human Values at Princeton University. 他の著書に *The Ethics of Identity* (2005), *Cosmopolitanism: Ethics in a World of Strangers* (2006).

URL: <http://www.appiah.net/>

Wikipedia: Kwame Anthony Appiah (born 1954 in London) is a Ghanaian philosopher, cultural theorist, and novelist whose interests include political and moral theory, the philosophy of language and mind, and African intellectual history.

Contents

1. Introduction: The Waterless Moat (干上がった堀)
2. The Case against Character (徳倫理批判)
3. The Case against Intuition (直観批判)
4. The Varieties of Moral Experience (さまざまな道徳的経験)
5. The Ends of Ethics (倫理学の目的)

本書の内容(Prologue)より

「本書は、わたしの専門分野である哲学的倫理学の仕事、いくつかの他の分野における研究者の仕事と、まっとうな人生を生きようとしている通常の思慮深い人の考えていることとに結びつける試みである。本書にはたくさん哲学者が出てくる。だが、同時に、かつて道徳の科学(moral sciences)と呼ばれた領域の実践家たちも多く出てくる——すなわち、心理学者、経済学者、人類学者、社会学者である。・・・

わたしが最初に担う学問の系譜の課題は、「実験哲学(experimental philosophy)」が、とりたてて新しいものではなく、「哲学」という言葉と同じくらい古いということである。わたしが挑戦したい常識は、「哲学が、今日では自然科学や社会科学に属する探求を放棄することによって、ある意味でより純粋にそれ自体になった」というものである。第二章では、実証的な道徳心理学におけるケーススタディを追いかける——とりわけ、いわゆる状況主義的研究(situationist research)が徳倫理の再興に対して提示した挑戦に焦点を合わせる。この対立と称されているものによって、「徳」のどこに価値がありどこに価値がないのかを示すのに役立つと思われる。第三章では、より幅を広げて、道徳哲学における直観の厄介な地位(vexed status of intuition)について、説明と理由の区別に焦点を絞って検討する。第

四章では、一連の独特の「道德感情」は人間本性の根深い特徴であるかもしれないという提案を真剣に受けとめ、明確な道徳的反省の伝統と原始的とされるもののが一致するかどうかを探求する。最終章では、本書のこれまでの探求を、広い古典的な意味での倫理学の試みに結びつける。・・・」(pp. 1-2)

1. Introduction: The Waterless Moat

The study of history confirms the reasonings of true philosophy. (Hume, THN III-2-10)

The Partition

共同体は歴史(物語)を中心に形成される。エルンスト・ルナン(Ernest Renan)も「国民とは何か」でそう言っている¹。わたしが属する西洋哲学者という共同体でも同じで、西洋哲学史という歴史を持っている。

ルナンは忘却や歴史誤認が国民形成の本質的要素であり、それゆえに歴史研究の進歩は国民にとって危険となりうるということを言っている²。また、歴史を語るというのは、現在の実践を正当化する方法でもある。それゆえ、現在の営為を正当化するような過去を捏造する欲求に駆られる。学問にとっても同様のことが言える。

心理学は短い歴史と長い過去を持っていると言われる。哲学はその逆が当てはまると言えるだろうか。以下では、哲学の連続性に関するいくつかの通念を覆そうと思う。哲学は、今日、それが「何でないか」(心理学、物理学、人類学などではない)によって定義される。哲学者が他の領域の研究者と協働できるためには、このような哲学の自己理解が新しいものであることが理解されなければならない。実験主義的ターン(experimental turn)は新しくない。そこから離れたことこそ、新しいのだ。

哲学の歴史を公平な視点を心がけて振り返ってみると、ルナンが「忘却」について言っていたことがよくわかる³。たとえばプラトンもアリストテレスも靈魂や生命の性質について、ほとんど生理学的と言える理論を持っていた。

¹ 「国民とは魂であり、精神的原理です。実は一体である二つのものが、この魂を、この精神的原理を構成しています。一方は過去にあり、他方は現在にあります。一方は豊かな記憶の遺産の共有であり、他方は現在の同意、ともに生活しようという願望、共有物として受け取った遺産を運用し続ける意志です」(鵜飼哲訳)『国民とは何か』所収インスクリプト、1997年、61頁。1882年ソルボンヌでの講演。

² 「忘却、歴史的誤謬と言ってもいいでしょう。それこそが一つの国民の創造の本質的因子なのです。だからこそ、歴史学の進歩は往々にして国民性にとって危険です。歴史的探求は、あらゆる政治構成体、もっとも有益な結果をもたらした政治構成体の起源にさえ生じた暴力的な出来事を再び明るみに出してしまうからです。統一は、つねに乱暴になされます。北フランスと南フランスの統合は、絶滅戦争と一世紀近くも続いた恐怖政治の結果です。」同上、47頁。

³ 「ところで国民の本質とは、すべての個人が多くの事柄を共有し、また全員が多くのことを忘れてのことです。フランス市民は誰一人、自分がブルクント人、アラン人、タイファル人、ヴィシゴート人のいずれの後裔だか知りません」(同上、48頁)。

アリストテレス主義を打破しようとしたデカルトの「機械論的哲学」(mechanical philosophy)は現代哲学の源流と言えると考える人は、デカルトを選択的に読みすぎ。デカルトは幾何学や光学にはまっていたし、数理的な自然科学者(mathematical physicist)として評価されたこともあった(デカルト座標とか)。牛や動物の解剖もしていた。信念の正当化に挑む心や知識の哲学者として位置づけられるのは後になってからである。デカルトは心身問題(霊魂と身体の関係)を、脳についての実証的な仮説(視床下部の側にある松果体において霊魂が身体に働きかける)に訴えて解決しようとしていた(『情念論』)。

ロバート・フックは *Micrographia* (1665)⁴で、「真の哲学は手と目を用いて始め、次に記憶を通じて進み、理性によって継続される。そこでとどまらず、また手と目に戻り、一つの器官から他の器官へと継続的にぐるぐる回る」と書いたが、これは彼は常識として書いていた。中世の大学では「哲学」は体系的な知識を指す語であり、自然哲学、道徳哲学、形而上学に分かれていた。

一般化しすぎないように、ちょっと気をつけて議論する必要がある。現代哲学が生まれる前にも、理性と経験、思弁と実験という区別は存在した。ホップズがロバート・ボイルの真空ポンプの研究が「哲学」の名に値しないと言った理由の一つは、ユークリッド的な論証的知見の方が実験的知見よりも優れているという考えであったが、もう一つの理由はポンプから空気が漏れるというものであった。デカルトが哲学を木に喩えて形而上学だけでなく自然学や医学、機械学(mechanics)、道徳学(morals)などを含めたのはまし(ただ、われわれの考えでは哲学の一分野である道徳学が、医学と同じ実践的領域に含まれている)⁵。マーガレット・キャヴェンディッシュは、『実験哲学に基づく観察(Observations upon Experimental Philosophy, 1668)]⁶で、実験哲学が思弁哲学に優先されてはならないと述べた。というのは、ほとんどの実験は思弁から生まれるからであり、それゆえ技術者は研究者の従者なのである。とはいえ、キャベンディッシュにしる、ロックにしる、いかなる思想家も完全な抽象の領域にとどまっていなかったという点は重要である。

18世紀になると、実験はいろいろな分野で重要視されるようになった。ダランベールはロックが形而上学を「精神に関する実験科学」に還元したとして誉めた。ヒュームの『人間本性論』の副題は **Being an Attempt to Introduce the Experimental Method of Reasoning into Moral Subjects** である。彼らが精神について述べたことは、実験ではないにせよ、人間が実際にどう行為するかというストーリーを用いており、実証的な観察に基

4 『イギリス哲学・思想事典』では「ロバート・フック」および「ロイヤル・ソサエティ」の項で紹介されている。ミクログラフィアは顕微鏡で観察した記録。「細胞」を造語。

5 「哲学全体は一つの樹木のごときもので、その根は形而上学、幹は自然学、そしてこの幹から出ている枝は、他のあらゆる諸学なのですが、後者は結局三つの主要な学に帰着します、即ち医学、機械学および道徳、ただし私の言うのは、他の諸学の完全な認識を前提とする究極の知恵であるところの、最高かつ最完全な道徳のことです」『哲学原理』桂寿一訳、岩波文庫、1964年、24頁。

6 『イギリス哲学・思想事典』には独立の項目なし。シーベンガーの『科学史から消された女性たち』でも読まないダメか。

づくものだ。ヒュームの英国史は、『人間知性の研究』のような著作のプロジェクトの延長である。EHUの注でヒュームは、理性と経験をまったく別物と区別する人々がいるが、それはまちがいだと述べている。「われわれの推論と結論の土台になるのは、究極的には、経験だ」⁷。

今日の哲学理解は、リードとカントの認識論への取り組みが前兆となっていると主張されることがある⁸。しかし、リードも真の発見は実験による観察か、観察か実験に基づく厳格な推論によって導かれる結論によると述べている(*Essays on the Intellectual Powers of Man*)。

分析判断／総合判断の区別をもたらしたカントも、その両方に関する事柄について研究していた点でまったく他の人々と異ならない。批判哲学を構築する一方で、風や地球の自転や子供の体育方法について書いていた。今日われわれが理解するような哲学と心理学を概念的に分割する仕事をしたが、仕事としては分裂はなかった。

20世紀の事典類は、20世紀以前の哲学者について、「哲学者兼数学者」「哲学者兼文学者」「哲学者兼政治経済学者」というように、複数の領域を当てることが多い。哲学という学問が縮まっているということである。昔の諸学問の境目がどこにあったのかを知るためには、昔の哲学史を読むのがよい。Thomas Stanleyの『哲学の歴史』(4巻本、1650-1660年代)では、古代哲学だけ。1740年代のJacob Bruckerの*Historica Critica Philosophiae*は、近年の哲学のサーベイとして、コペルニクス、ケプラー、ガリレオ、ニュートンなどの自然哲学が含まれている。ヘーゲルの『哲学史講義』(1832)では、合理論と経験論の区別が入っているが、ロックはデカルトと一緒に合理論に入れられている。ニュートンについては、形而上学ではなく経験や観察に基づいて自然学を構築したことが厳しく批判されている。19世紀に入ると、自然学(物理学)は別の専門になったが、当時は哲学を「哲学と心理学」と置き換えてもよい感じだった。

ヘーゲルの『講義』の10年後ぐらい、またGeorge Henry Lewesの当時相当有名だった*Biographical History of Philosophy*が出版されたころ、ディケンズが勉強熱心なアメリカ人の中での哲学の流行をおちよくった文章を書いている(『マーティン・チャズルウィット』⁹)。

代表的な哲学者たちに、彼らの仕事のどの部分が真の哲学(echt philosophy)で、どの部分

⁷ EHU Foot. 7 Para. 3/5 p. 44 gp. 38.

⁸ 注によると Knud Haakonssen だそう。J.B. Schneewind 編の *Teaching New Histories of Philosophy* (2004) 所収の “The Idea of Early Modern Philosophy”。この本はネット上で読めるようだ。おもしろそう。 <http://www.pdcnet.org/tnhp.html>

⁹ 「いま、どんな講演に出席しておいでなんです、奥さん？」またブリック夫人のほうに向きなおって、マーティンの友人はたずねた。「水曜日には、魂の哲学です」「月曜日には？」「犯罪の哲学です」「金曜日には？」「植物の哲学です」「木曜日をお忘れよ。統治の哲学なんですけどね」第三のご婦人がいった。「ちがうわ」ブリック夫人がいった。「それは火曜日よ」「まあ、そうだったわ！」その婦人は叫んだ。「もちろん、木曜日には物質の哲学なことね」『マーティン・チャズルウィット(上)』北川悌二訳、ちくま文庫、1993年、563頁

が違うかをわからせるのは、難しいだろう。

Psychologism and Anti-Psychologism

心理学は哲学から生まれたのか。その逆だと主張することもできる。ホッブズ、ロック、ヒュームは人間精神が感覚や観念を処理する仕方を説明するために、連想心理学の説明を洗練させようとしていた。子ミルにとっては、論理学は「心理学と区別される学(Science)でも、それと対等の学でもない。それが学であるとするれば、それは心理学の一部ないし一部門」であった(「ウィリアム・ハミルトンの哲学の検討」全集 9 巻 359 頁)。ヴィルヘルム・ヴントがライプツィヒ大学で 1879 年に実験心理学の最初の研究所を作ったとき、彼は哲学教授だった。ハーバード大学の心理学の研究室はウィリアム・ジェームズ・ホールにある。心理学者も哲学者も彼を祖先だと思っている。彼の同僚だったジョサイア・ロイスは 1902 年に米国心理学会の会長であり、1903 年には米国哲学会の会長に選ばれている。ジャーナルも同様。Mind は長い間哲学のジャーナルとみなされているが、1878 年に創刊された後、数十年は、現在では心理学に分類されるような論文を掲載していた。The Journal of Philosophy は 1904 年に The Journal of Philosophy, Psychology, and Scientific Methods として創刊された¹⁰。

20 世紀哲学の創始者のうちの二人である、フッサールとフレーゲは反・心理学主義者であった。よく言われる話では、ヴントの弟子の一人のテオドル・リップス(Theodor Lipps)が、論理学は「思考の物理学以外の何物でもない(nothing if not the physics of thought)」と述べた(1880)。これ以降の世代は、この深刻な過ちを根絶しようとした。フレーゲにとっては、思考(the thought, der Gedanke)は心的な出来事ではなく、抽象的な物体(abstract object)であった。哲学は心理学と対比的に自己を定義しようと苦労していた。が、哲学と心理学の分離にはかなり時間がかかった(1930 年代ぐらいまで、哲学と心理学は大学レベルでは同じ講座で研究されていた)。

もちろん、同じことが経済学と道徳哲学についても言える。経済学の父とみなされるスミスはスコットランド啓蒙の道徳哲学者の一人だった。子ミルも『政治経済学原理』を著している。ミルは経済人という概念を使った初めての人かもしれない。ケインズは 20 世紀前半の経済学を変革した人だが、彼の『確率論』は哲学書といえる。20 世紀で最も影響力のある哲学者の一人であるフランク・ラムジー(1903-30)は、人間の経済的行動の数理的説明を試みる 20 世紀のあらゆる試みの下敷きになる意思決定理論を構築した。ラムジーは哲学者にとっては哲学者だが、ケンブリッジ大学のラムジー講座は経済学教授が占めている。

¹⁰ The Journal of Philosophy が名前を変えた経緯も一度調べる必要がある。The Journal of Philosophy was founded in 1904 as The Journal of Philosophy, Psychology, and Scientific Methods by Frederick J. E. Woodbridge and J. McKeen Cattell. In 1906, Wendell T. Bush became associated with the Journal as co-editor. In 1923, the Journal was incorporated in the State of New York under its present name. <http://www.journalofphilosophy.org/generalinfo.html>

経済学は統計の処理方法について研究を洗練させてきたが、近年では経済人の合理的行動というアプリアリな(=実験を用いていないで真とみなされている)心理学説から離れて、近年の実験心理学の知見を入れ、行動経済学とかニューロ経済学とかに関心を向けるようになってきている。

わたしは自分の哲学理解に従って系譜学を作っているにすぎない。他方、哲学と人文科学(human sciences)を切り離したい人は、その関心に応じた歴史を描いてきた。

この、実験を恥ずかしがる哲学とは何か。 *Qu'est-ce qu'un philosophe?* 第二次世界大戦前後の分析哲学の全盛期には、次のような答えが返ってきただろう。哲学とは概念分析だ。概念の明確化と意味の探求を行う。言葉の意味の探求は、その言語を知っている者なら誰でもできるものである(=なんらかの実験をする必要はない)。哲学的主張が真であるとすれば、それはその主張に含まれる言葉の意味によるものである。これは、カントの言う「分析的」真理、すなわち、述語が主語の概念の中に「(こっそりかもしれないが)含まれている」ものである。

「概念分析」は知識、存在、真理、時間、意味、心身、善、正、美、自由、正義などの重要な概念の検討であり、哲学の最初期から行われてきた。これらの概念は、実験もしなければ、現実世界の詳細にもこだわらないという意味で、本質的にアプリアリな仕方で行われた。実験について考慮するときは、実際にどうなるかではなく、ある結果が出たとしたらどのように答えるか、について考慮された(#倫理学で言えば、人々がどう考えているかではなく、人々がどう考えるべきかに専念してきたということだよ)。唯一、現実の思考法にアクセスする仕方は、われわれがどのように「述べる(あるいは述べないか)」という言語分析であった。

上の「われわれ」は当の言語(英語)を母語として理解するすべての人のはずだが、実際の事例は哲学者の議論から採られた。オーデンはこう書いた。「オックスブリッジの哲学者は要するに／中流階級の託児所の生産物／彼らの議論の関心は／保母の言葉の真の意味」。

オーデンの詩は哲学者についてのカリカチュアだとはいえ、彼がオックスフォードで詩学の教授だった 1956-1961 のころには、このように聞こえたに違いない。当時オックスフォードの哲学教授だった J.L.オースティンは「わたしが、猫がマットの上にいると信じているのではない場合に、それでも『猫がマットの上にいる』と言ったとしたら、われわれは何と言うべきだろうか？」と述べた(1955年のハーバード大学のウィリアム・ジェームズ講演で)。「ジョンに子供がいない場合に『ジョンの子供はみな坊主』という発言がなされたとしたら、どう答えるべきだろうか」。オースティンにとっては、「どう答えるべきか」は一般人に質問をしてデータを集めるべきような問いではなかった。というのは、英語を母語としている人にとっては、答えは明白であり、オースティンと違う答えをする人は、(定義的に)英語が不自由な人になったからである。ケンブリッジ大学のウィトゲンシュタインによる『哲学探究』の第 21 節にはこうある。「Isn't the weather glorious to-day?」という文章を、われわれは疑問文と呼ぶ。だが、これは叙述文として用いられているのである」。最近

まで、この「われわれ」が誰なのかを尋ねたり、実証研究したりするのは傲慢あるいは無意味だと考えられていた。

こうして哲学は独自の居場所を獲得した。が、このコンセンサスの基盤になっていた意味論は、1960年代初頭に分析哲学内部からの批判によって攻撃されるようになった。クワインは、文がそれに用いられる言葉の意味のみによって真になるという分析的真理の考えは間違っていると主張した。分析性についての信念は、クワインによれば、経験主義のドグマの一つであり、認識論は「心理学、それゆえ自然科学の一章としての位置に落ち着く」ものであった。

反・心理主義は今日、哲学の一つの立場に過ぎなくなった。大分割(The Great Partition)は(哲学と心理学の研究室が分かれたという意味で)制度的なプロジェクトとしては成功したが、知的なプロジェクトとしてはつまづいた。オックスフォード哲学者のマイケル・ダメットは、フレーゲとフッサールの過ちによって、「認知科学」という名の下で心理学が哲学に再び攻撃をしかけてくるきっかけを作ったため、心理学をふたたび追い出すには、フレーゲとフッサールの過ちを正さなければならない、と述べている(*Frege and Other Philosophers*, 1991)。これは半分冗談かもしれないが、半分本気だろう。しかし、現在ではこのような試みは大きくは受け入れられておらず、むしろ反・反心理主義が主流である。心の哲学では心理学者や心理言語学者と長年一緒に研究しているし、言語哲学を心の自然主義的理論に基礎付けようという試みもある(アッピアの最初の二冊の著作もそう)。進化論モデルは政治理論から知識論まで、哲学の多くの領域で常識となっている。哲学は、クワイン以降、自分のまわりを堀で囲んでいるが、その堀の水はすべて干上がっているという状況が続いている。(＃ここからこの章のタイトルが来ている)

Moral and Nonmoral

道徳的探求に関しては、哲学は実証研究とは縁がないと考えられるかもしれない。実証的な道徳心理学の有用性に対する哲学的な懐疑主義の源泉は、啓蒙思想以来の西洋哲学に存在する、事実と規範の区別に関する形而上学的・認識論的な理解に由来する。ヒュームは「である」から「べし」へのステップは決定的な重要性を持つと述べた¹¹。

だが、こう述べたヒューム自身は、道徳的探求において証拠や実験をするべきでないとは考えていなかった。ヒュームは、自然科学だけでなく道徳的テーマにも実験哲学を適用すべきだと考えていた¹²。

¹¹ THN Bk. 3 Pt. 1 Sec. 1 Para. 28/28. アッピアの注には、ヒュームのこの発言をめぐる解釈論争の文献紹介がある。

¹² For to me it seems evident, that the essence of the mind being equally unknown to us with that of external bodies, it must be equally impossible to form any notion of its powers and qualities otherwise than from careful and exact experiments, and the observation of those particular effects, which result from its different circumstances and situations. THN Intro. Para. 8/10 p. xvii

最近の多くの哲学者は道徳的な判断は道徳外(nonmoral)の判断と同じ客観性と truth-aptness(真偽を問いうる性質)を持つと考え、「である」と「べし」を厳格に区別するのはおかしいと主張している。しかし、仮に「である」と「べし」が区別されるとしても、道徳が実践的であるかぎり、現実世界の事実が重要でないはずがない。それを認めない人はいないと思われるが、心理学は道徳にとって重要でないという人はいるかもしれない。そういう人には次のように質問してみよう。

人間が心理的に従えない規範を作る意味は何か。結局のところ、「べし」は「できる」を含意している(人に何かすべきだと言うなら、その人ができるということを前提にしている、ということ)。ヒュームは『人間知性の研究』の最初に、二種類の道徳哲学者を区別した。道徳的に行うべきことを人々に説得するタイプの哲学者と、道徳に関する人間本性を探究するタイプの哲学者である(EHU Sec. 1 Para. 1/17 p. 5)。だが、後者のタイプの研究によって非現実的と考えられるような助言を、最初のタイプの哲学者がやったとしても、無駄なことは明らかである。というわけで、少なくとも道徳について心理学者に発言の機会を認めることは正当である。ヒュームはある手紙の中で、古代哲学者の道徳論は、自然科学におけるのと同様、完全に仮説的で、経験(experience)よりも創案(invention)に依拠しており、空想(fancy)に頼って人間本性を無視して徳と幸福の体系を築いていると述べた¹³。

上のような反論は、20世紀後半の哲学に向けてより適切に述べられるもので、アリストテレスなんかは道徳論において経験とか歴史とかを重視していたと思われる。

また、ここ50年の間に、事実っぽい命題(factual-sounding propositions)が、規範っぽい命題(normative-sounding propositions)を生み出す可能性について、つまり「である」が「べし」を生み出す可能性について、多くの議論があった。マッキンタイア¹⁴は1950年代後半の論文で、ヒュームの正義論は、「べし」を「である」から導く試みであったと述べている。彼によると、ヒュームの立場は「正義の諸規則に従うことによって損をする人は誰もいないのだから、われわれは正義の諸規則にしたがうべきである」というものである。そして、「われわれはみな長期的利益になることをすべきである」という主張は、評価的なものではなく、定義であり、道徳の基盤となる必然的(分析的?)真理である。この解釈では、ヒュームが「である」と「べし」について述べたときに警告していたのは、宗教的道徳に注意せよということであり、彼は宗教ではなく人間的開花(完成)によって道徳の基盤を作ろうとしていたのである¹⁵。

¹³ John B. Stewart の *The Moral and Political Philosophy of David Hume* (1963) の 343 頁、注 16 からの孫引きのようだ。

¹⁴ Wikipedia: Alasdair Chalmers MacIntyre (born January 12, 1929 in Glasgow, Scotland) is a philosopher primarily known for his contribution to moral and political philosophy but known also for his work in history of philosophy and theology. He is the O'Brien Senior Research Professor of Philosophy at the University of Notre Dame. http://en.wikipedia.org/wiki/Alasdair_MacIntyre

¹⁵ A.C. MacIntyre, "Hume on 'Is' and 'Ought'," *Philosophical Review* 68(4):1959; 451-468.

他の議論は、われわれの言語の働き方に依拠するものである。フィリッパ・フットは、やはり 50 年代後半に、無礼(rude)という否認を表す評価語は「尊敬の欠如を表明することにより、相手の気分を害する」振る舞いについて正しく用いられると述べた。あなたが無礼さについて論じる気がある場合、上のような条件を満たした(非評価的な)命題を受け入れることは、その振る舞いが無礼であるという(評価的な)命題を同時に受け入れることを含意する。「道徳的命題を主張するにせよ否定するにせよ、道徳語を用いる人は、その語の使用規則を守らねばならない。その規則の中には、何が当該の道徳判断を支持・反証する証拠になるかについてのルールも含まれる」と彼女は結論している¹⁶。ジョン・サールも規範や制度が言語にビルトインされている仕方を列挙している。ジョーンズがスミスに「5 ドル払う約束をします」と述べたなら、そうする義務を引き受けたのであり、結論は、ジョーンズは 5 ドル支払うべきである、というものになる。道徳の言語については後の章で詳しく論じる。

もう一つの議論を紹介する。わたしが大学生のときに習ったもので、次の二つのもっともらしい前提を受け入れるならば、道徳外の主張から道徳的な主張を導くことができるはずであるという結論になる、分析哲学的なスタイルで述べられた議論である。

二つの穏当に見える前提はこうである。前提 I 「すべての主張は道徳的主張であるか、道徳外の主張である」。前提 II 「ある主張が道徳外の主張であるならば、その否定文も道徳外の主張である」。この二つの前提を受け入れるなら、基礎的な論理によって、道徳的主張を道徳外の主張から導くことができるとされる。

たとえば、「ジョンは善い人間だ」という道徳的主張と、「メアリはジョンが大嫌いだ」という道徳外の主張があるとしよう。メアリが、善人でない人は大嫌いだと主張し、しかも、ジョンについてはよく知っていると主張したとしよう。この場合、あなたは次のように言うかもしれない。A: ジョンは善人であるか、メアリはジョンを大嫌いであるかのいずれかである(一方が真(偽)なら他方は偽(真)という形の選言命題)。

前提 I からすると、主張 A は、道徳的な主張であるか、道徳外の主張である。わたしはいずれかよくわからないので、両方の可能性を検討してみよう。

主張 A が道徳外の主張だとしよう。ところで、前提 II によって、「メアリはジョンが大嫌いだ」が道徳外の主張だとすると、その否定である「メアリはジョンを大嫌いではない」も道徳外の主張になる。これはまあそうだと考えられる。その場合、三段論法で、《A: ジョンは善人であるか、メアリはジョンを大嫌いであるかのいずれかである。ところで、メアリはジョンを大嫌いではない。したがって、ジョンは善人である。》ということになる。この場合、道徳外の主張 A から、道徳的な主張「ジョンは善人である」が導かれたことになる。

主張 A が道徳外の主張であると考えたことがおかしかったのだと、あなたは主張するかもしれない。そこで、A は道徳的主張だと仮定してみよう。その場合でも、次のようにして

¹⁶ Philippa Foot, "Moral Arguments," *Mind* 67(268):1958;507-8, 510.

道徳外の真理から道徳的真理を導くことができる。《メアリはジョンが大嫌いだ。したがって、ジョンは善人であるか、メアリはジョンを大嫌いであるかのいずれかである。》(# 選言で追加しても真理値は変わらないため)

この議論をそれほど真剣に捉える必要はない。たとえばこういう問題もある。主張 A の正しさを信じるためには、メアリがジョンを大嫌いだという十分な根拠か、ジョンが善人であるという十分な根拠かのいずれかが必要だろう。

仮に、あなたが主張 A を正しいと信じるのは、メアリがジョンを大嫌いだという十分な根拠があるからだとしよう。その場合、あなたは彼女がジョンを大嫌いではないと信じるようになれば、主張 A を信じる根拠を失い、主張 A はもっともらしい前提ではなくなるだろう(# 最初のルートでは「したがって、ジョンは善人である」という結論が出なくなる)。次に、ジョンが善人であるという十分な根拠があるとしよう。その場合、主張 A が正しいとするあなたの信念は、(ジョンが善人であるという)道徳的主張に「基礎づけられている」ことになる(# だから、最初のルートでは、道徳的主張から道徳的主張が導かれたことになる)。というわけで、ある一文をじっと見ている、それが道徳的主張なのかどうかはわからず、それを信じる根拠がどういうものなのかに依存すると言える。

というわけで、この議論を真剣に受け止める必要はないが、少なくとも、道徳的主張を道徳外の主張から導けないというときは、それがどういうことを言わんとしているのかに注意する必要があるのは確かである。「である」から「べし」は導けないという主張をドグマとして受け入れることには留保すべきであろう。

The Psychology of Virtue

「大分割」が数十年しか経っていなかった 1961 年に、リチャード・ウォルヘイム¹⁷は次のように書いた。「最近の道徳哲学の大きな特徴は、哲学の問いを心理学の問いから熱心に切り離そうとしてきたことだ。これは従来曖昧だった区別を明らかにしたという点で非常に重要だ。しかし、区別がすでにはっきりしたので、今後の道徳哲学の課題は、人間本性

¹⁷ Wikipedia: Richard Arthur Wollheim (5 May 1923 – 4 November 2003) was a British philosopher noted for original work on mind and emotions, especially as related to the visual arts, specifically, painting.

Son of an actress and a theatre impresario, Richard Wollheim attended Westminster School, London, and Balliol College, Oxford (1941-2, 1945-8), interrupted by active military service in World War II.[1] In 1949 he obtained a first in Philosophy, Politics and Economics, and began teaching at University College London, where he became Grote Professor of Mind and Logic and Department Head from 1963 to 1982. He was visiting professor at Harvard University, Columbia University, the University of Minnesota, Graduate Center, CUNY, the University of California-Berkeley, UC Davis and elsewhere. He chaired the Department at UC Berkeley, 1998-2002. On retirement from Berkeley, he served briefly as a guest lecturer at Balliol College. Wollheim gave several distinguished lecture series, most notably the Andrew M. Mellon lectures in Fine Arts, National Gallery of Art, Washington, D.C. (1984), published as *Painting as an Art*. http://en.wikipedia.org/wiki/Richard_Wollheim

の二つの側面を明確に切断しておくことではないだろう。道徳哲学はカントの伝統からアリストテレスやヒュームの伝統に戻る必要がある¹⁸。

ウォルヘイムが言及した伝統は「徳倫理」として復活することになった。彼の主張は、徳倫理復活の契機となったエリザベス・アンスコム の 1958 年の論文“Modern Moral Philosophy”と同じ路線であったと言える。アンスコムは、現在はまだ心理学の哲学が不十分なので道徳哲学をやってもあまり有益ではないと述べ、「バトラーからミル」までの道徳哲学者を罵倒した。良心こそが人間精神の主要器官であると教えたバトラーについては、「良心が最も邪悪なことを人に命令する可能性があるということを知らないように思われる」と述べた。「自己立法」について述べたカントについては、「多数決が尊重されている時代において、各人が日々行う決定のそれぞれを、(常に 1-0 であるがゆえに)多数派の決定と呼ぶのと同じくらいばかげている」と批判した。子ミルの規則功利主義については、「なぜ行為が功利原理というただ一つの原理に従わねばならないのかがまったく明らかでないため、おろかである」と述べた。シジウィックについては、「かなり退屈で」「野卑だ」と述べた。全般的に、アンスコム の同時代人たちは、正しい行為は神の法によって説明されるという「倫理の法的理解(*law conception of ethics*)」の影響下にあると言う。現代の道徳哲学者は「べし」の特別な道徳的意味に拘泥しているが、これが法的理解(すでに失われた神の法への信念)を前提していることを忘れている。まるで刑法や刑事訴訟がなくなった後に「犯罪的な(*criminal*)」という言葉が残っていて、話者がその語を発するとき特別な意味や感情が伴っていると分析するようなものだ¹⁹。

このように痛烈に批判したあと、アンスコムは倫理学は言語分析などよりも基本に戻って、行為、意図、快樂、欠乏といった概念を研究した方が有益だと述べた。それは彼女が実際に *Intention* などの著作においてすでにやっていたことである。こういうことをしたあとに、ようやく、徳の概念を考察する段階に入ることができるだろう、と彼女は予言していた。

その後、アンスコムのアリストテレス熱と徳の心理学の勧めは次世代の哲学者に引き継がれた。(とはいえ)この新しい道徳哲学は、正直さ、勇気、同情などの徳の概念を分析するものであった。近年、ようやく、実証的な研究も考慮されるようになってきた。これらの心理学的主張は正しいのであろうか。

第二章では、ケーススタディとして、徳倫理を考察する。

本書においてわたしがやろうとしているのは、人々に経済学、心理学、哲学を再び合同させる、すなわちある意味で「道徳科学」を再構築するよう訴えることである。ここ数十年の間に、保母が真に意味していたことの探求ではなく、保母が実際に何を言っているのかを探求したり、保母を MRI に突っ込んだりする哲学者が増えてきた。「実験哲学」と呼ばれていたものが復活しつつあるのだ²⁰。

¹⁸ F.H. Bradley, *Ethical Studies* (OUP, 1962)の序文 xvi 頁から。

¹⁹ G.E.M. Anscombe, “Modern Moral Philosophy,” *Philosophy*, 33:1958;1-19.

²⁰ 本文注 34 に、そういうことを試みているとされる主要な哲学者の文献あり。

「新しい哲学はすべてを疑わしくする」とポスト・ガリレオ時代にジョン・ダン²¹は述べた。現在の哲学の動きも同じである。道徳理論が心理学に裁かれたら、どうなるのだろうか。二つの境界があいまいになることで、倫理学は発展するのだろうか。要するに、道徳哲学は自然化できるのか？

²¹ John Donne (c. 1572-1631)。『イギリス哲学・思想事典』によれば、metaphysical poetsの代表者。